

出島エリア

■エリアの概要

出島は、鎖国体制の中で国際交流の窓口があったことを示す歴史的遺構であり、鎖国期・幕末期・明治期それぞれの時代の建物が立ち並ぶ、長崎の歴史を感じられる場所です。寛永13年(1636)、市中に散宿していたポルトガル人を収容するために民間の資金で築造され、後にオランダ商館が設置された出島は、対欧貿易並びに西欧の学術・文化の受け入れ窓口として、我が国の文化に大きな影響を与えました。現在では一部の建物と南側の周囲石垣が復元され、平成29年度には、出島表門橋や対岸の公園が完成する予定です。



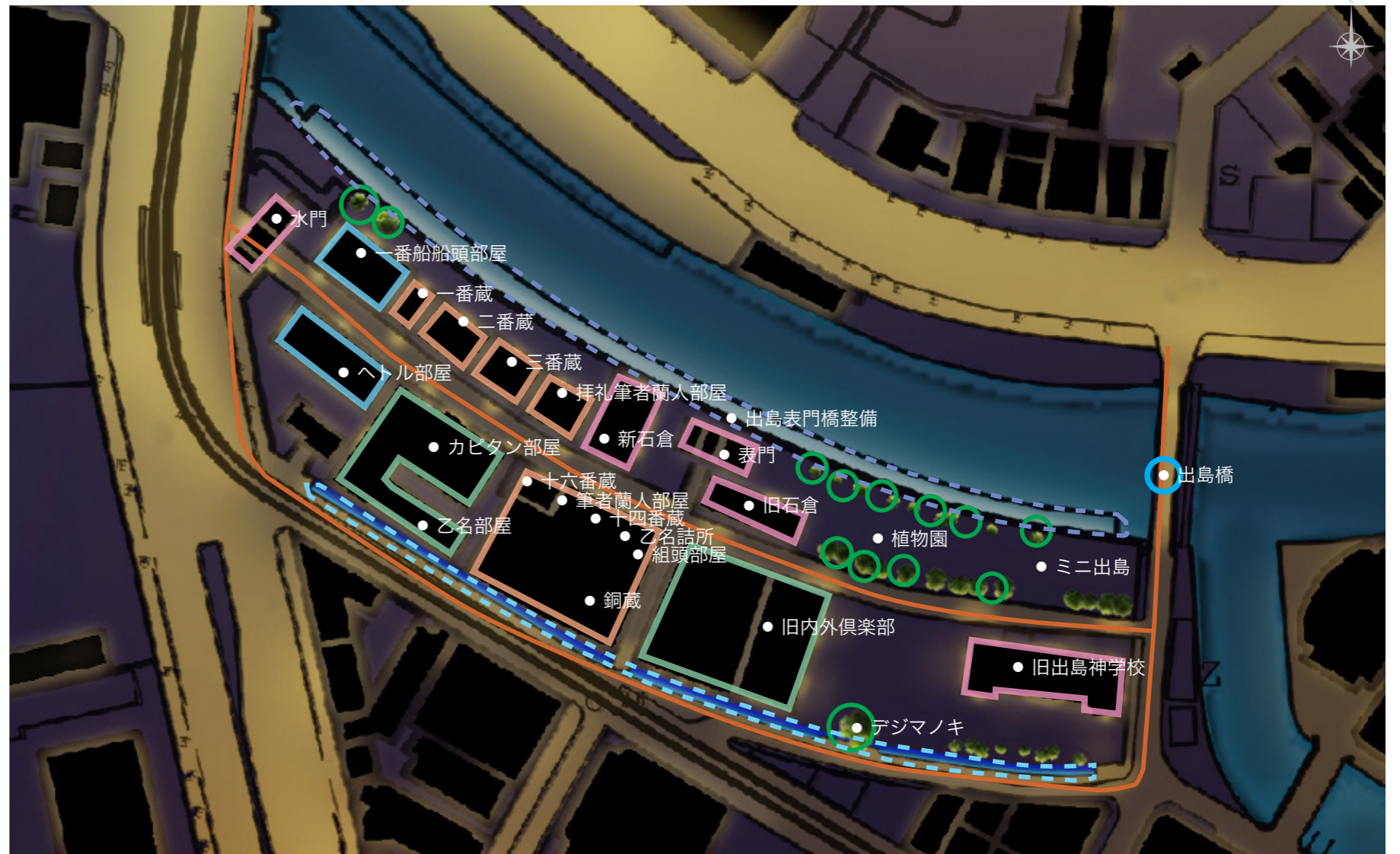
コンセプト：歴史の記憶をたどる光

鎖国期から明治期に至るまで、それぞれの時代の建物の表情を生かしながら、かつての街並みを歩く楽しさを感じられる夜間景観の形成を目指します。

■方針

- ・建物は、それぞれの文脈に応じた様々な漏れ光の演出手法により、重層的なまちの歴史と文化を演出します。
- ・水際の白壁や植栽等を積極的にライトアップし、美しく映える水景をつくります。

- … 主な動線
- … 漏れ光演出①：窓の障子をスクリーンに、室内のシルエットを影絵として映す
- … 漏れ光演出③：日本人商人の部屋を意識し、ゆらぎ調光のLEDや天井への間接照明で行灯のような光を見せる
- … 漏れ光演出③：オランダ人の部屋を意識し、天井シャンデリア等の煌めきを直接見せる
- … ライトアップ：外壁への照明を併用する（ただし投光器による大雑把なライティングは行わない）
- … 植栽をアップライトするエリア
- … 橋梁のライトアップ
- … 白壁のライトアップ
- … 南側水路のライトアップ



4. 夜間景観向上のためのガイドライン

4-3. 中・近景の夜間景観づくり

4-3-2. 出島エリア

現状調査

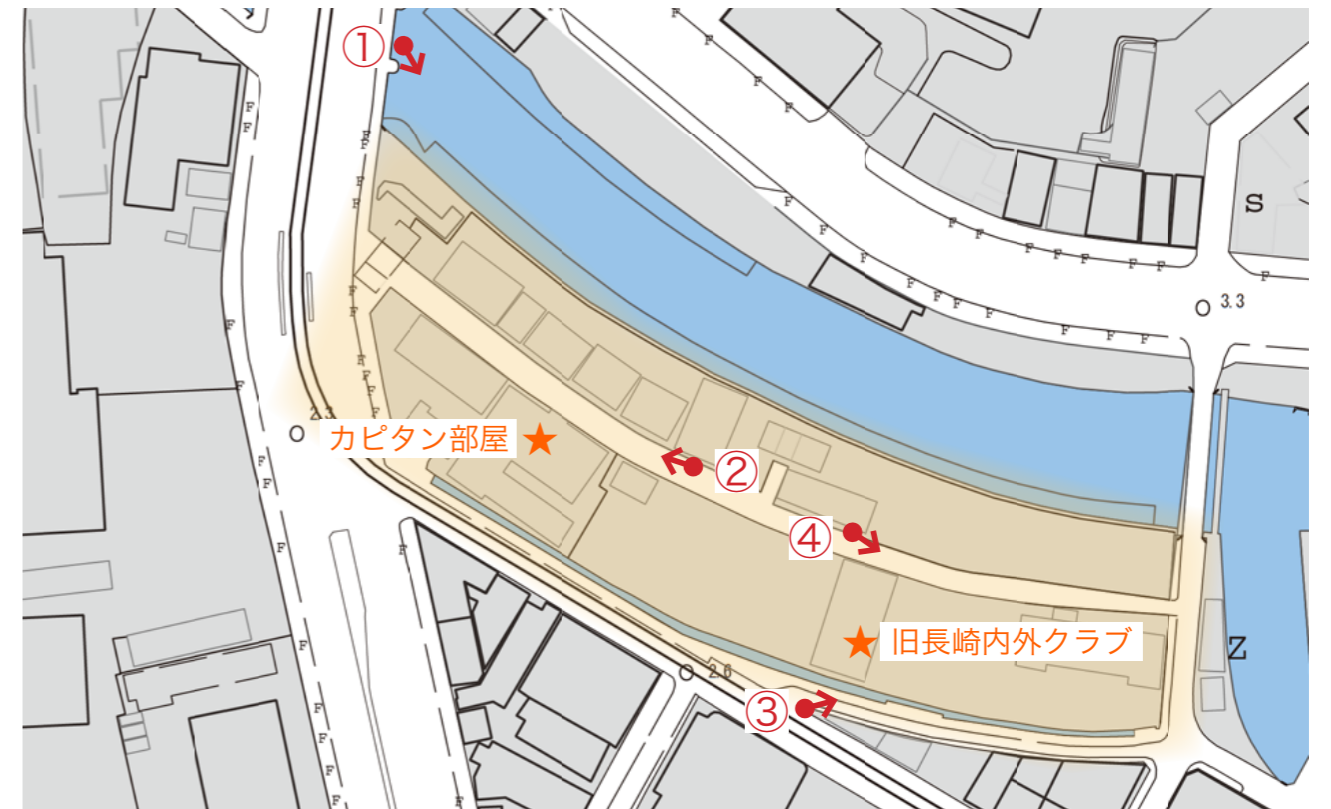
■現状分析と課題

出島表門橋側から眺めることになる景色は、水面への映り込みに配慮した照明計画とすることで、もっと印象的な景色を演出することができます。

中央通りには既に行燈が置かれ良い雰囲気ではありますが、両脇に並ぶ建物が暗く、鉛直面の明るさが不足しています。

洋館である旧出島内外倶楽部のライトアップは、外部からの投光器で行われており、明るさは十分なものの、復元された建物の繊細な意匠が伝わりにくい状態となっています。

★ … ランドマーク
📷 … 調査写真撮影箇所



①出島北側



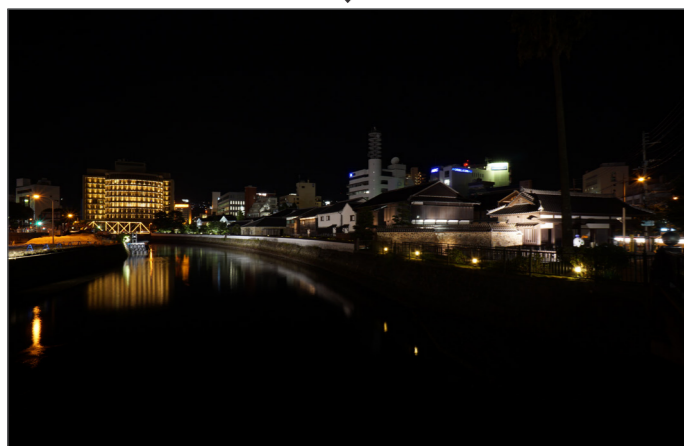
②カピタン部屋周辺



③出島南側



④中央通り



川を挟む景観は風情があるが、周辺の建物が出島よりも目立っており、出島の雰囲気を感じさせることはできていない。



行灯による照明の雰囲気はよいが、暗い建物に比べて行燈の輝度感が目立つ。

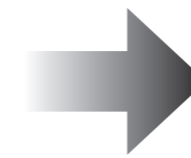


洋館が均一的に明るく照らされている。青色のカラーライティングもやや繊細さに欠ける。



一般的な街路と同様にポール型のナトリウム灯で照らされている。

	現状調査から見た問題点	
陰影の考え方		・行灯で明るさがとられており、路面照度は大きな問題なし
色温度		・色温度は大きな問題なし ・カラー照明の使い方は改善の余地あり
鉛直面輝度		・行灯の表面輝度が高い
グレア対策		・投光照明によるグレアあり
演色性の優先度		・基本的には問題ないが、一部光源に演色性の問題あり
器具		・大きな問題なし
オペレーション		・大きな問題なし



夜間景観向上のための基本原則	
・路面照度は現状と同程度の 1-10 Lx 程度に設定する	
・漏れ光は 2700K 程度、外からの建物ライトアップは 3000K 程度とする ・カラー照明を使用する場合は、原色ではなく品のある色と光量とする	
・建物からの漏れ光を活用する ・行灯の輝度を抑える	
・ライトアップ用の器具や投光照明等のまぶしさが気にならないような器具選定や納まりとする ・行灯の輝度を抑える	
・人が多いエリアのため、Ra90 以上を基本とする	
・LED を基本とする	
・時間によるライトダウンを行い、施設閉館後の通行者にも快適な照明とする	

※ Lx (ルクス) とは：光によって照らされる面の明るさ (面積あたりの光束)
 ※ K (ケルビン) とは：光源の固有の色味を表す単位

※ 輝度とは：人の目に飛び込んでくる明るさ (面積あたりの光度)
 ※ Ra (アールエー) とは：光源による色の見え方の再現性を表す単位

4. 夜間景観向上のためのガイドライン

4-3. 中・近景の夜間景観づくり

4-3-2. 出島エリア

出島北側 整備イメージ



現状



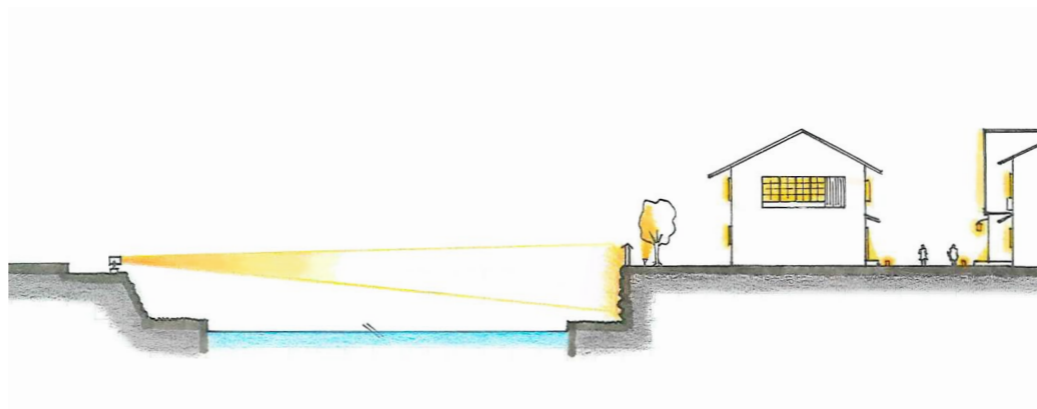
整備イメージ

■整備イメージについて

中央通りと同様に、建物内部からの漏れ光によって建物の造りを見せることで、それぞれの時代の建物が連続する出島の特徴を演出します。同時に、部分的な外壁のライトアップや、植栽のライトアップを行い、奥行き感を感じさせます。

対岸からは、白壁のライトアップを行い、出島が海を隔てた島であった頃を思い起こせるような水景とします。

周囲の橋梁やビルのファサード（正面）は、出島とのバランスをとるため、ライトアップの輝度を少し抑えることを推奨します。



断面イメージ (S = 1/300)



水際の石垣ライトアップ事例（小倉）

4. 夜間景観向上のためのガイドライン

4-3. 中近景の夜間景観づくり

4-3-2. 出島エリア

中央通り 整備イメージ



現状

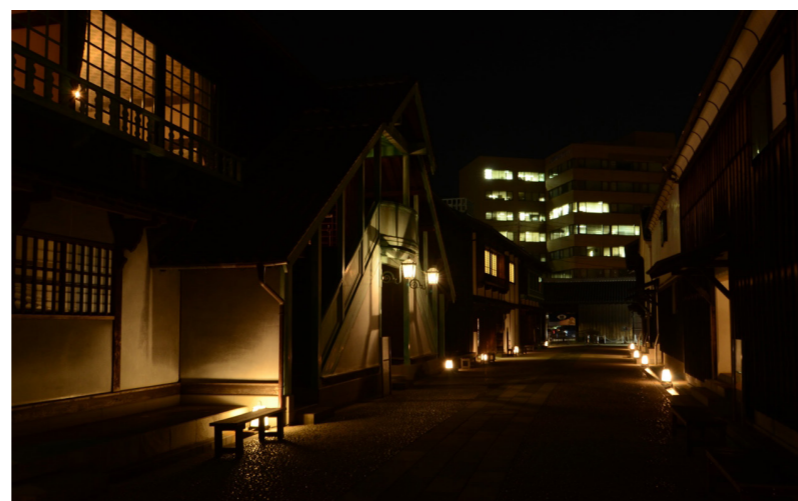


整備イメージ

■整備イメージについて

2016.10.06 に現地実験

中央通りは、あえて照明のための新たな要素を追加せず、面する建物からの漏れ光を演出できるような照明を点灯させます。カピタン部屋のように外観に意匠照明のあるものは、それを活用して外観のライトアップとします。行灯は光源の選定を見直し、輝度のバランスがとれた照明とします。全体として、できる限り現状の要素を用い、あくまでも自然で優しい雰囲気照明手法により、鉛直面の明るさ感をつくります。



試験点灯時の写真：漏れ光やブラケット照明が明るさ感を与えている

室内の漏れ光をつくるための光源は、町人のための部屋では、ゆらぎ調光のLEDキャンドルを床に置き、行灯の炎が揺らいでいるような演出を、オランダ人が滞在した部屋では、天井できらめくシャンデリアを直接見せるような演出を行うなど、建物によって雰囲気を変え、それぞれの建物の時代性や個性を強調します。部屋によっては、あえて障子を閉め、人型の影を映し出す演出等も検討します。

4. 夜間景観向上のためのガイドライン

4-3. 中・近景の夜間景観づくり

4-3-2. 出島エリア

出島南側 整備イメージ



現状



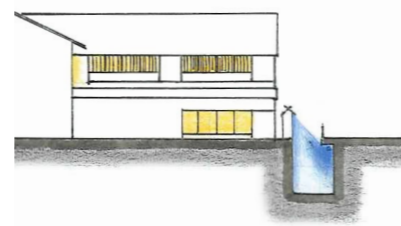
整備イメージ

■整備イメージについて

洋館の繊細な意匠を生かすため、漏れ光やブラケット等の照明を主体とした演出とします。外壁の素材に鮮やかな色味が使われている場合は、細い柱を小型の照明でアップライトするなど、外側から繊細なライティングを行います。

天然記念物である「デジマの木」はシンボルツリーとして、演色性のよい照明器具によってライトアップします。

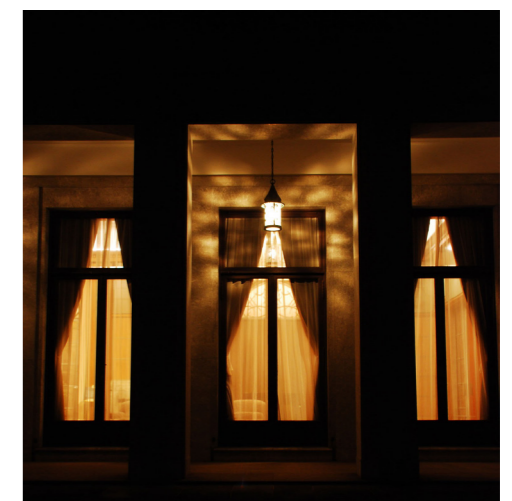
また、青色のカラーライティングは、LEDのブルーそのままの光源を使用するのではなく、洗練された青色の器具とし、かつ、光量を控えめにしして雰囲気を出します。



断面イメージ (S = 1/300)



効果的なカラーライティングの事例 (東京)



漏れ光や意匠照明による照明の事例 (同)